HPJ製作工房・おりほん・3

Twitter300字ss

2014年11月～2015年03月

森村直也
@hpjhal

機械仕掛けのシニカル・ノベル
HPJ製作工房

twitter企画、Twitter300字ssに
提出した作品集です。
Twitter300字ssについてはこちら
http://privatter.net/p/310549

クリスマス～ゴールドクレストの育て方

2014/11

あたし結構、デリケートだったんだよ？
お日様は好きだけど、当たりすぎると焼けちゃうし。半分日陰くらいが好き。西日ってのも良かったな。
お水は適度で良かったの。蒸れると色が悪くなるし。乾きすぎももちろんイヤ。風通しは欲しいけど、室外機の横は困ったわ。
本当は地面が良かったな。プランターはちょっと窮屈。少しは大きくなったんだから。
三年前とは違うのよ。
華やかに飾ってね。大きな星に賑やかなオーナメント。枯れてない枝葉を精一杯伸ばすから。
出会えてよかった。そう思ってる。でもね、ちょっとだけ、やっぱりここはつらいかな。
写真はキレイに撮ってね。こないだ生まれたあの子と一緒に。多分これが、あたしの最後の花道だから。

雪～雪衣（ゆきこ）の呪

2015/01

女は粉を零しつつ音を立てて倒れ込んだ。手刀を下ろした雪衣の少年は、巫女を認めて膝を折る。
「間者です」
巫女は僅かに頷くと、鈴紐を静かに引いた。

少年は衛士をじっと見送る。畏れに竦められた背は、ついぞ少年に気付かなかった。
僅かな衣擦れに振り返る。ふわりと色袖が舞い降りた。
「ありがとう」
細い腕が少年を抱き寄せる。
「私には、貴方だけ」
雪深いこの地にあって、雪衣は呪をなした。
呪とは人を人でなくすもの。見られず知られず、有るを無きへ変えるもの。
主を除く全てに。護るために。
「僕は姫さまのものです」
巫女の首筋に顔を埋め、少年はひたと笑う。
彼が巫女のものであるように。
――巫女もまた、非人の少年だけのものなのだと。

雪～宇宙（そら）に降る雪

2015/01

女の頭上で導入光管は淡い光を湛えるばかりだ。地区間窓は淡い光の明滅を繰り返し、畑も牛舎も白く覆われ埋まってしまった。零れた溜息は白く広がり、溶け消えた。
計画天気は霧雨の筈だった。集光鏡は役割を果たしていない。修理しようにも金など無く。引き開けた扉の先、冷気は屋内にさえ。
……終わりという文字がちらつく。
「提案がある」
女を認め男はにやりと笑んだ。端末の画面を示す。
「観光業ってのをやってみようと思ってる」
――雪？　なにそれ！
――地球に降るやつ？
――ふかふかって聞いたけど。
「もう少し足掻いてみようぜ」
金が貯まれば。ポンコツコロニーにも、まだ、道が。
――うん。
女は涙をこらえながら。僅かに確かに、頷いた。

時～人生という名の

2015/02

「覚えてろ！」
お約束の言葉と共に悪の怪人キラーは去った。
「ありがとう、キーパー！」
笑顔を湛えた管理職から逃げるようにキーパーは踵を返しオフィスを出る。
正義のマスクを取り去る頃、同僚が呑気に戻って来た。
「お仕事しますか」
漏れた溜息をそのままに、出てきたドアへと手をかける。

＊

「ロス指数は３７。標準です」
報告すれば仕事は終了。マッチポンプと人は言う。
潰して守って様子を見、社員の暇つぶし度を測るのだ。
キラーが去る瞬間の残念そうな。キーパーが出ていく際の期待外れを責めるような。社員の視線はいつも痛い。
仕事なのだが。
――これもまた人生（Ｋｉｌｌ-Ｔｉｍｅ）
キーパーはいかなる時でも楽しげな同僚の後を、追う。

時～胡蝶の夢

2015/02

彼女はやんわりと輝く球の中にいた。
眠っていると伝えられる。眠りと共に世界は始まり、目覚めと共に世界は終わると。
「世界は女神の夢なのです」
神官の告げる、その、違和感。
「夢なら何故ここにいるの」
球に触れる。感じるのは微かな抵抗と確かな拒絶。押し続ければ壊れるという直感。
神官の口元が笑みを作る。
「あなたの方がご存じでしょう」
だから僕は球に触れる。球を否定し、世界を拒否する。

＊

「逃げるな！」
目覚めると一番愛しい顔があった。
私を拒否した彼女の、涙を浮かべた目の中に凡庸な見慣れた顔が見える。
私でも良いの？
……女の私でも。
迷いながら時を止めた彼女を、叩き起こすことを選択する。
僕では駄目と分かった、から。

花～沈丁花の幻

2015/03

「宗教的解脱には香りが不可欠とされてきた」
麻薬の効果さ。美貌の教授、木元香苗は黒曜石の目を細めた。
「神隠しの社は今日も健在」
歩む先、沈丁花の中に社があった。手に持つボトルがちゃぷりと揺れた。
「神隠しの別の解釈を知っているか。消えたのではなく」
風が巻く。酩酊を感じるほどのその。
手を引かれた。引いた少女は香苗へ笑み。
香苗は緩く首を振った。
「君は幻。私が現実となったから。ねぇ」
振り返れば、若い男が無様に尻餅をついていて。
「子供が沢山いるんだ。教えてっていう手のかかる」
だから。
ボトルの中身をぶちまける。マッチを一本擦り投げた。
見つめる少女へ、淡く確かに。
「さようなら、『香苗』」
少女と炎に、背を向けた。